

40th anniversary commemorative event 秋季特別展

発掘調査写真が語る守山の移り変わり

digest version of exhibition photos

2020.10.3(土)~11.29(日)



埋蔵文化財センター完成イメージ図(昭和55年)

Prologue

今秋、開館40周年を迎える埋蔵文化財センターは、昭和55年11月3日の開館以来、市内各地の遺跡発掘調査の拠点としての役割を果たしてきました。

今回の特別展示は、これまで蓄積してきた、工事前の風景や周辺の様子が写り込んだ発掘調査写真を展示し、昭和、平成の時代に大きくその姿を変えた守山のその都度の光景をご覧ください。その調査でわかった古の守山を知っていただくために開催します。

Scene1 益須寺遺跡周辺

益須寺遺跡の名称は、『日本書紀』に記載された古代寺院「益須寺」に由来する遺跡です。その建立地が推定される吉身6丁目界隈は昭和40年代まで駅に程近い地理にありながら、のどかさが漂っていました。

しかし、高度経済成長期以降、宅地開発の目が向けられるようになりました。その結果、駅周辺から途切れることのない市街地となりました。



平成2年の立入町の遠景



守山イトマンスイミングプールの調査(S62)



レックス寺番館の調査(S63)



立入が丘幼稚園の調査(H3)

Scene 2～3 守山駅周辺の移り変わり 吉身北・南遺跡

現在の守山駅は、昭和48年4月に橋上駅として誕生しました。それ以降、アクセス道路の建設や駅周辺の整備、再開発事業などが絶え間なく繰り返されました。その結果、守山市の玄関口としての景観が整えられてきました。

駅西口はかつてのメインストリート・ほたる通り商店街に繋がる表玄関として、東口は工業地域として発展してきました。現在では京阪神に程近い立地から、住宅地として開発されています。



現在の守山駅周辺の様子



上段：セルバ守山、建設前後の様子、
下段：ベッセルイン守山駅建設前後の風景



上：駅前グリーンロードの発掘調査風景(S48)
中：沿道の調査前風景(S56) 下：現在の様子



ライズヴィル都賀山
建設前風景(S54)と現在



上：グランドメゾン発掘調査風景(S57)
下：コスモ守山4番館建設当時(S63)



上：守山駅地下道の発掘調査(S58・S60)
左：駅東口広場建設前の風景(S57)



小島モータープールの調査(H10)



駅前グリーンロード建設前の発掘調査の様子(H8～9)

Scene4 吉身西遺跡

吉身西遺跡は、市役所やその他の公共施設、病院など、いずれもが近くに位置し、JR守山駅の徒歩圏内という立地にあります。

インフラ整備と相まって、区画整理地などでは瞬く間に住居や店舗が建ち並び、現在は農地を探すことがむづかしい市街地になっています。



守山郵便局建設時の調査 (S53)



済生会守山市民病院と滋賀県立総合病院間の農地の土地区画整理事業の調査 (S61)



昭和58年当時の吉身西遺跡周辺の様子



済生会守山市民病院の調査 (H7~8)



目田川改修工事の様子 (S59)



目田川改修工事の様子 (H8)



欲賀町区画整理地の様子

Scene 5 欲賀町の移り変わり

欲賀町集落周辺には、欲賀南遺跡、欲賀遺跡、欲賀西遺跡といった遺跡が分布しています。平成4年に、ほ場整備事業に先立って欲賀城、欲賀、欲賀南遺跡の発掘調査が5カ年にわたり行われました。平成15年からは、欲賀土地区画整理事業に先立って欲賀遺跡・欲賀南遺跡の発掘調査が行われました。

この2つのビックプロジェクトによって、それまでの畑地は整然と区画された住宅地になり、大林団地と一体化した大規模な住宅地の風景が広がっています。



欲賀町最初の調査風景と今の様子



区画整理事業に伴う調査風景 (H15・19)



欲賀地区ほ場整備に先立つ調査風景 (H4~9)

Scene6 下長遺跡 モリやまの工業地帯の変貌

古高町地先の通称、古高工業団地は、かつては旧野洲、栗太郡の郡境でもあった堺川を跨いだ栗東市側と一体となる広大な田園地帯を形成していました。

しかし、昭和46年（1971）以降、数次におよぶ工業団地造成工事の結果、現在多くの社屋が建ち並ぶ一大工業地帯に変わりました。また、工業地帯周辺も宅地開発の波が押し寄せ、工業団地と大門町集落の間の水田地帯も宅地造成によって、現在では多くの住宅が建ち並んでいて、今後も増え続けることでしょう。昭和、平成の時代に工業地域として開発されたことを契機に、この地域もまた、景観が一変しました。



下長遺跡出土の儀杖



現在の工業団地の様子



上：工業団地造成工事の様子
下：工事前の風景（H1）

昭和58年の造成工事前風景（上）と調査風景（下）

造成工事（H2）

Scene7 川田遺跡・川原田遺跡

野洲川に程近い川田町には、川田遺跡と川原田遺跡の広がりがあります。昭和の終わり頃から、川田遺跡では工場建設と宅地造成、川原田遺跡では、くすの木通り建設とそれに伴う宅地開発によって、川田町の景観も大きく変わりました。



川田遺跡の広がり 現在の様子



古高-川田線試掘調査の様子（S62）



チッソポリプロ樹脂工場建設前の様子・調査の様子（S60～H1）



古高-川田線発掘調査の様子（S62）

Scene8 寺内町金森 区画整理事業で変わった！

『野洲町共有文書』には、元禄16年（1703）の頃の様子として、「金森は志那海道筋にあり、家は200戸余軒あり、問屋、酒屋などもあって繁盛富栄のところである。」と記されていて、卓越した集落であったことがうかがわれます。

かつて、蓮如上人が滞在した金森町は寺内町の先駆的な街並みが形成され、今もそのたたずまいを残していますが、昭和の時代になり、城ノ下団地や山柿団地の造成、平成の土地区画整理事業によって町並みは大きく変わりました。



寺内町の町並みをとどめる金森



山柿団地の調査（H58）



平成8年の区画整理事業調査



昭和59年の三津川の風景



区画整理事業・語らい学び舎通りの調査（H13）



昭和59年の調査風景

Scene9 河西小学校周辺 長塚遺跡・阿比留遺跡

河西小学校周辺には、長塚遺跡と阿比留遺跡が広がっています。昭和50年代までの河西学区は、板倉街道など旧来からの道沿いに集落が形成され、その周りに水田が広がる、普遍的な農村景観を残していました。

しかし、平成になり、長塚遺跡の広がる範囲は県道42号線、阿比留遺跡はくすの木通りの開通によって、宅地開発の波が押し寄せました。平成4年以降は宅地造成が頻発しました。現在は、レインボーロード（琵琶湖大橋取付道路）以東の田畑の多くが住宅地に置きかわっています。



昭和57年の河西小学校



くすの木通りの調査（H3）
左下は宅地造成の調査（H8）



上：県道42号線完成写真 下：調査風景（S56）

Scene10 国史跡・下之郷遺跡周辺の移り変わり

昭和55年（1980）、埋蔵文化財センター開館時のリーフレットの遺跡分布地図には下之郷遺跡は記載されていません。その直後に発見された比較的新しい遺跡なのです。

しかし、遺跡発見から40年を経過した現在、100か所以上で発掘調査が実施され、今から2,200年前の弥生時代中期末に環濠集落が営まれていたことがわかりました。その当時の社会や人々の生活を考える上で重要な遺跡と評価され、平成14年に国の史跡になっています。

発掘調査件数が示すように、道路建設や工場、宅地開発によって、遺跡周辺の景観は急激に変わりました。



平成5年のくすの木通りの様子



くすの木通りの調査（H8～9）



下之郷遺跡発見の調査（S55）



くすの木通りの調査（S58）



県道赤野井-守山線沿道の調査（H8）

Scene11 播磨田町周辺の開発 酒寺遺跡・播磨田城遺跡

播磨田町域には、レインボーロード以东の播磨田東遺跡とは別に、集落の南東側に酒寺遺跡、北東側に八ノ坪遺跡、さらに南西側に中世城郭跡・播磨田城遺跡が分布しています。

平成に入って、酒寺遺跡の広がる地域では、平成元年からの播磨田町土地区画整理事業の施工とくすの木通りの開通、平成6年の大型店舗（現モリーブ）開店により、瞬く間に宅地化が促進されました。



土地区画整理事業の様子（H2）



土地区画整理事業前の様子（H2）



くすの木通りの調査（H8～9）



モリーブ建設前の調査（H5）



広畑の里発掘調査風景（H10～12）



Scene12 守山南中学校周辺 古高遺跡と経田遺跡

古高遺跡が広がる地域は、昭和50年代後半に千代町方面から伸びる県道片岡栗東線と浜街道（県道26号線）がつながりました。その後、それまで金森町止まりであった市道古高-川田線も開通し、両線の沿道は店舗・住宅開発によって、その景観は大きく変わりました。

経田遺跡古高遺跡東辺からオーバーラップして古高～今宿町間に広がる田畑でも、昭和の終わりから宅地造成の波が、平成には新中山道の北西側の土地区画整理事業が施工され、現在は市街地になっています。



上・左：守山南中学校建設風景（S58）



上・右：古高-川田線建設前の調査風景（S61）



経田遺跡調査前風景（S63） ・下：調査の様子（H2）

Scene13 市民運動公園周辺

守山市中域の水田地帯であった、この地域には昭和52年に市民運動公園がつくられはじめた後は大きな変化はありませんでした。

しかし、昭和61年に市民ホール開館、平成12年には平安女学院大学守山キャンパス開校、平成23年の語らい学び舎通りの開通、一方の石田三宅遺跡の範囲では、明見の郷造成とすこやか通りの開通などによって、その景観を大きく変えました。



左：明見の郷調査風景（S61）・右：すこやか通り調査風景（H9）



明見の郷の風景



中島遺跡・石田三宅遺跡の広がり様子



左：平安女学院大学の建設前風景（H9）・右：調査風景（H9）



市民ホール建設前の風景・調査風景（S59）

Scene14 播磨田東遺跡

播磨田東遺跡は播磨田町の東側に広がる遺跡です。地域は、昭和39年（1964）に琵琶湖大橋と国道8号線をつなぐ琵琶湖大橋取付け道路、現在のレインボーロードが開通したことによって、河西ニュータウン・ハイムタウンに代表される宅地開発が誘発されました。

平成には、「くすの木通り」も開通し、開発は留まることなく、播磨田町集落の東側一帯の景観は一変しました。



河西ニュータウン・ハイムタウン造成前風景



遺跡東辺の発掘調査前風景 (S58)



河西ハイムタウンの調査の様子 (S52)



左：発掘調査前風景 中：調査風景 右：前方後方型周溝墓の検出 (H9)

Other SCENE 横江町では、弥生の里

現在の横江町・弥生の里は、昭和58（1983）年から4年がかりで実施された横江遺跡の発掘調査の後に誕生しました。

約36,000㎡を調査した結果、中世の村をまるごと発掘したことにより、横江村に営まれた中世集落の姿を現代に甦らせました。



弥生の里調査航空写真 (S58)



弥生の里調査風景 (S58~60)

この村は11世紀代に始まり15世紀代まで営まれます。13世紀前半頃までは「家」は分散居住していましたが、13世紀後半からは、有力な農民の屋敷を中心に家（屋敷地）が密集する集村的な集落に変わっていきます。現在の住宅は、中世のように溝で区画されていませんが、鎌倉時代の横江村以来、再び住宅地に生まれ変わりました。ちなみに「弥生の里」は、明見の郷や衣笠の里と同様に遺跡にちなんだ名称です。

Other Scene 二町鏡遺跡と塚之越遺跡

二町鏡遺跡、塚之越遺跡は二町町から古高町に広がっている遺跡です。かつては、両集落と南西側の栗東市域にかけての一带は水田が広がっていましたが、平成5年に新設道路「新中山道」が開通、JR栗東駅の開設も相まって、北西側の古高町にかけて宅地開発が急速に進み、その結果、現在は栗東市側と一体化した大規模な住宅街を形成しています。



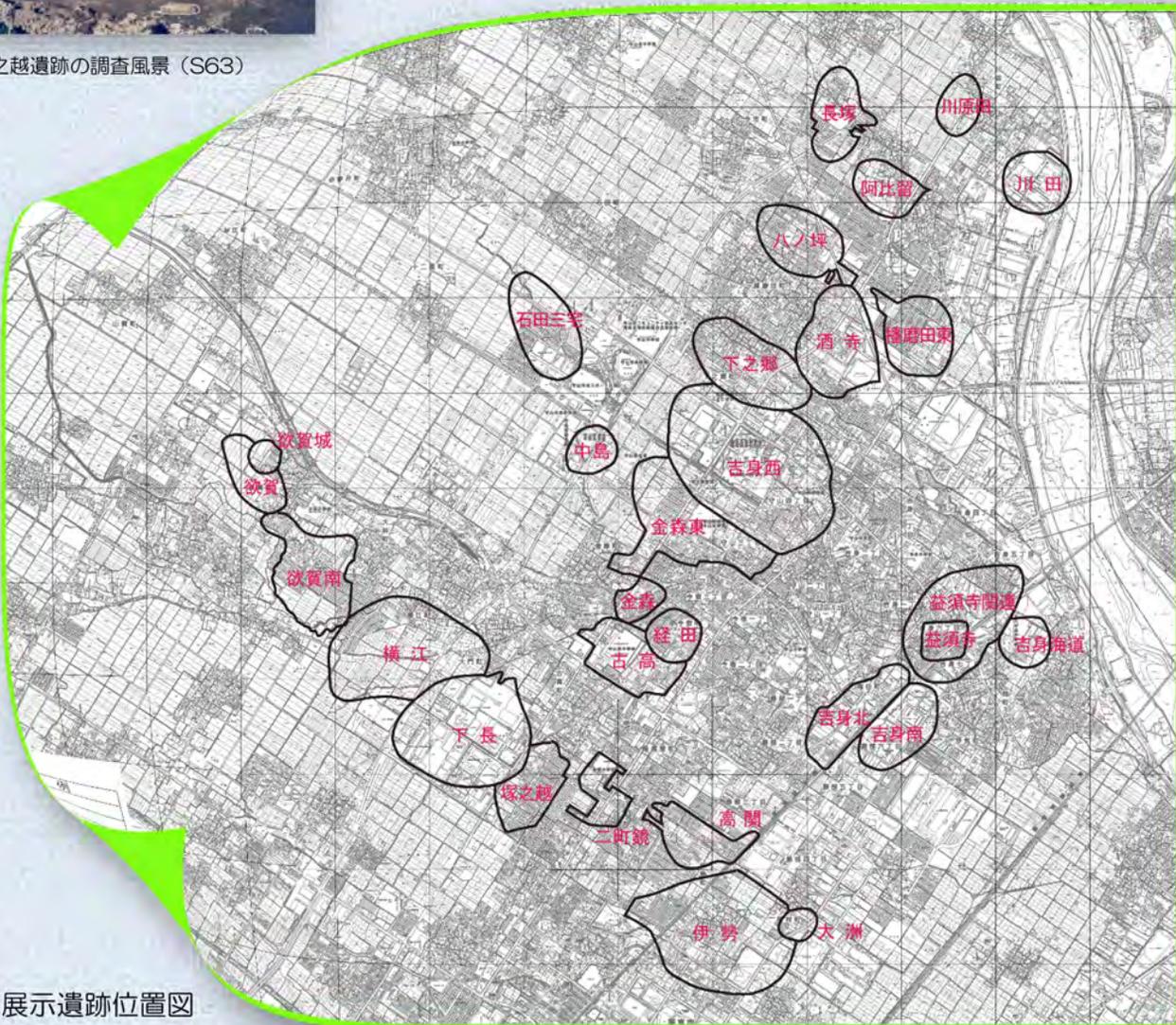
物部小学校建設前の調査風景 (S63)



新中山道の調査風景 (H2)



塚之越遺跡の調査風景 (S63)



展示遺跡位置図

Other Scene 伊勢遺跡周辺 伊勢～阿村町の変貌

伊勢遺跡は守山市の南東辺、JR線路を越えた伊勢・阿村町から栗東市にかけて広がる遺跡です。遺跡の発見は昭和55年、埋蔵文化財センターの開館と同じく40年前に遡ります。

伊勢遺跡は平成24年に国の史跡として指定され、今や弥生時代の遺跡の代名詞になっていますが、そのきっかけは平成4年に大型建物が発見されたことです。かつてはのどかな一帯でしたが、JR栗東駅の設置や区画整理事業などにより開発が進みました。



上：1次調査 (S56)
下・左：2次調査 (S56)



4次調査風景 (S57)



上：大型建物検出調査地 下：大型建物 (H4)



都市計画道路建設に先立つ調査風景 (S58)



区画整理事業に伴う28次調査風景 (H5・6)

Other Scene 大鳥団地の誕生

大鳥団地は昭和59年に宅地分譲がはじまり、現在は大鳥自治会として、150戸、人口407人を数えます。もともとは、昭和37年(1962)から大阪府堺市に本社を置く大鳥繊維工業(株)守山工場が操業していましたが、再開発によって住宅地に生まれ変わりました。自治会の名称もその名に由来しています。



現在の大鳥団地



団地造成工事に先立つ調査・調査前風景 (S58)



守山市立埋蔵文化財センター
〒524-0212 守山市服部町 2250 番地
TEL&Fax 077 (585) 4397
mail : maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

開館時間：午前9時から午後4時まで
休館日：火曜日・祝日の翌日・年末年始
入館料：無料
HP : <http://moriyama-bunkazai.org/center/>

